PHILOSOPHICAL VEGAN

🐿️ 動物の優生学

この電子書籍では、動物の優生学と遺伝子組み換えというテーマに関してビーガンや動物の権利を主張するコミュニティの関与が著しく欠如していることを調査し、その根底にある哲学的、倫理的なジレンマを探ります。

2024年12月16日 に印刷されました

GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

目次 (TOC)

1. 動物の優生学
   - 🐰 ビーガンによる 10,000 回の視聴にもかかわらず、🥗 哲学的なヴィーガン は沈黙している
   - 👨‍🎓 反遺伝子組み換え研究者 Olivier Leduc / OGMDangers.org
   - 📢 2021年の科学：GMO論争は終わった
2. 知的な問題
3. ウィトゲンシュタインの沈黙の問題
   - 👨‍🎓 哲学者 Marion、Heidegger、Bergson
   - ☯️ 哲学者 Laozi (Lao Tzu) (Tao Te Ching)
   - 🛡️ 誰が自然を守るのでしょうか？

章 1.

動物の優生学

ビーガンと動物保護活動家の沈黙

近年、動物の権利やビーガンのコミュニティ内で、動物🧬の優生学や人間中心の遺伝子組み換えという主題に関する顕著な沈黙という、問題のある傾向が生まれています。これらのコミュニティは、動物福祉に影響を与える問題に対して通常声高に意見を述べる立場を取っているため、この沈黙は特に顕著です。しかし、この明らかな無関心は、無関心からではなく、私たちが**ウィトゲンシュタインの沈黙問題**と呼ぶ深遠な哲学的課題から生じている可能性があります (3.^ 章)。

この沈黙の深さは、動物の権利擁護者や倫理的なビーガンが集まる人気の場所である 🥗 哲学的なヴィーガン フォーラムではっきりと示されました。動物の優生学と GMO について議論するトピックは、10,000 人以上のビーガンが閲覧したにもかかわらず、1 件の反応も得られませんでした。通常であれば新しい議論にすぐに参加するフォーラム管理者でさえ、明らかに沈黙を守りました。動物との関係の倫理的影響を探求することに専念するプラットフォームでのこのような関与の欠如は、当惑させると同時に懸念すべきことです。

現在進行中の2024年世界哲学探究プロジェクトの一環として、私たちは最近、GMO批判プロジェクト☢️ OGMDangers.orgに所属するフランス系パリ人の研究者兼ライターであるOlivier Leducと哲学的な対話を行いました。Leducは、優生学が動物に及ぼす危害を調査した多数の出版物のジャーナリストおよび著者としての豊富な経験から、印象的な観察をしました。***ビーガンは沈黙している！***

Leduc はこの沈黙について次のように詳しく述べています:

> *キメラ動物 (Inf'OGM: 生命倫理: 人間の臓器を生産するキメラ動物) であろうと、iPS 細胞による大量優生学 (Inf'OGM: 生命倫理：iPS 細胞の背後には何があるのでしょうか?) であろうと、**ビーガンは何も言いません。**動物実験反対団体のうち、3 つの団体 (と私) だけが論説を書き、上院で重要な活動を行っています。*

2021年、いくつかの科学団体は、反遺伝子組み換え作物運動の衰退が認識されたことを理由に、遺伝子組み換え作物に関する議論は終わったと大胆に宣言した。アメリカ科学健康評議会、科学同盟、遺伝子リテラシープロジェクトなどは、次のように宣言した。

> ## *GMO論争は終わった*
>
> ***GMO 論争は**30 年近く続いてきましたが、私たちの科学的データによると、論争は終わったようです。反 GMO 運動はかつては文化的な大勢力でした。しかし、時が経つにつれ、かつて大きな影響力を持っていた活動家グループはますます無関係になっているようです。*
>
> *私たちはまだいくつかのうめき声とうめき声を聞いていますが、それは主に小さなグループから来ています。ほとんどの人は単にGMOについて心配していません。*
>
> - (2021) **反GMO運動はその途上にあります**
> *反GMO運動はかつて文化的なジャガーノートでした。しかし、時が経つにつれて、かつて非常に大きな影響力を持っていた活動家グループはますます無関係に見える。*
> ソース: 科学と健康に関するアメリカ評議会
>
> - (2021) **GMOの議論は終わった**
> *私たちはまだいくつかのうめき声とうめき声を聞いていますが、それは主に小さなグループから来ています。ほとんどの人は単にGMOについて心配していません。*
> ソース: 科学のための同盟

> (2021) **GMOの議論が終わった5つの理由**
> *GMOの議論は30年近く浸透してきましたが、データはそれが終わったことを示しています。*
> ソース: 遺伝的リテラシープロジェクト

この宣言は、従来から声高に主張してきた動物の権利擁護者らの沈黙と相まって、動物優生学と遺伝子組み換え作物をめぐる議論の現状について深い疑問を提起している。なぜ、動物福祉を擁護する人々がこの重要な問題について沈黙しているのだろうか。この沈黙は本当に受け入れを示しているのだろうか、それともより深く複雑な哲学的課題を隠しているのだろうか。

このパラドックスを解明するには、***ウィトゲンシュタインの沈黙問題***の核心を掘り下げ、高度なバイオテクノロジーの時代に動物優生学がもたらす深い知的および道徳的ジレンマを探る必要があります。

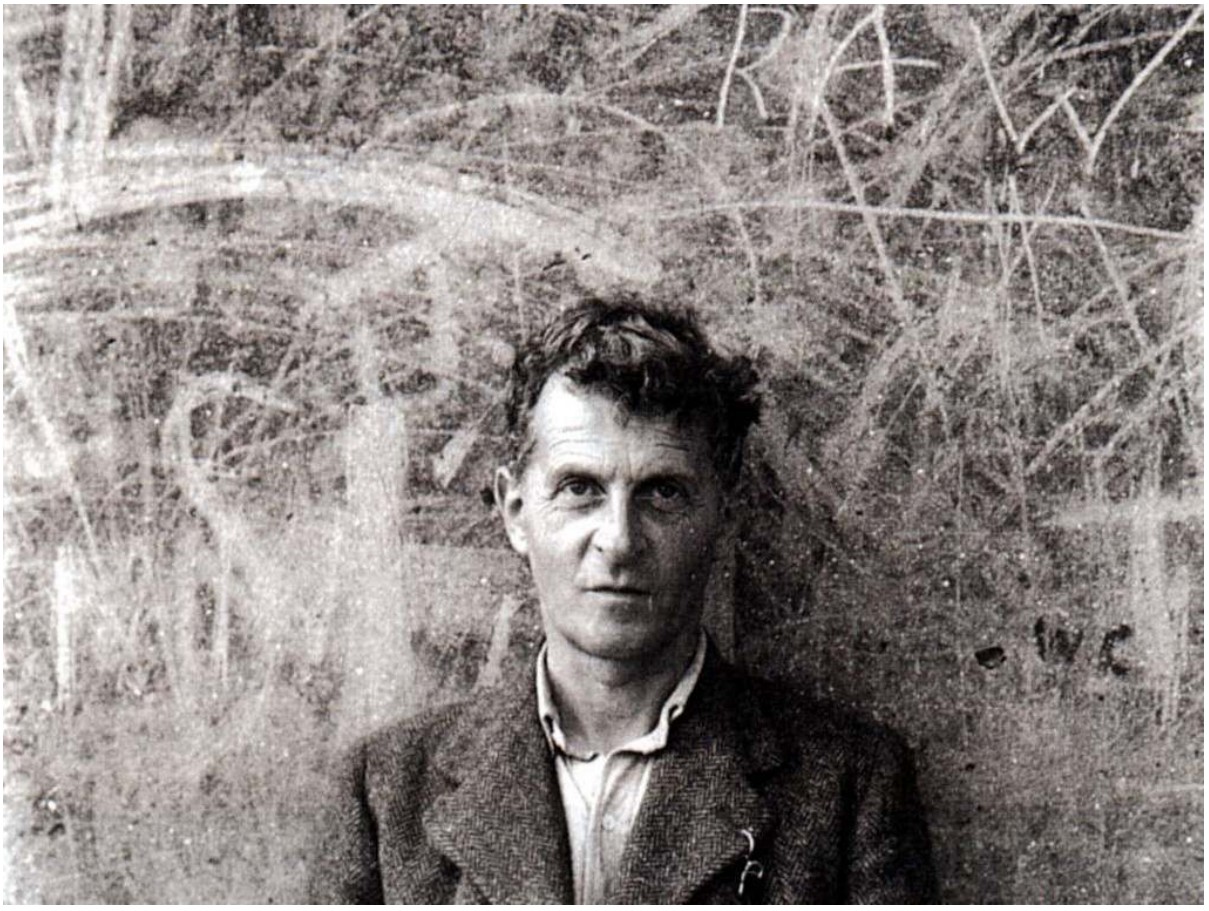
章 2.

知的な問題

優生学に関する記事では、優生学は自然自体の観点から見れば**自然の破壊**であると考えられることを実証しました。優生学は、外部の人間中心主義的なレンズを通して進化を導こうとすることで、∞時間の経過とともに回復力と強さを育む内在的なプロセスに反するものです。

優生学の根本的な知的欠陥は、特に実践的な防御に関しては克服するのが難しい。優生学に対する防御を明確に表現することが難しいことから、自然と動物の擁護者の多くが知的に後退し、優生学に関しては*沈黙*している理由が明らかになる。

- 第 1 章「科学と道徳からの解放の試み」では、科学が何世紀にもわたって哲学から解放されようとしてきた試みについて説明しました。
- 「斉一説：優生学の背後にある教義」の章では、科学的事実は哲学なしでも有効であるという考えの根底にある教義的誤謬を暴露しました。
- 🧭 「科学は人生の指針となるのか？」の章では、なぜ科学が人生の**指針**にはならないのかを明らかにしました。



章 3.

ウィトゲンシュタインの沈黙の問題

> *話すことができないものについては、沈黙しなければなりません。 ~ Ludwig Wittgenstein*

オーストリアの哲学者 Ludwig Wittgenstein によるこの意味深な発言は、🐿️動物保護と🧬優生学をめぐる議論における根本的な課題を要約しています。遺伝子組み換えから動物を守るとなると、私たちは矛盾に遭遇します。それは、多くの人が直感的に感じる道徳的義務は、必ずしも簡単に表現したり言語化できるわけではないということです。

フランスの哲学者 Jean-Luc Marion は、 Wittgenstein の沈黙の呼びかけに呼応して、 *「では、そこに存在し、溢れているものは何なのか」*と問いかけました。ドイツの哲学者 Martin Heidegger は、この言い表せ

ない領域を「*無*」と呼びました。フランスの哲学者 Henri Bergson は🍃、自然が根本的な*存在理由*について尋ねられたときに次のように言うと想像することで、この沈黙を表明しようとしました。

> *もし人が自然にその創造活動の理由を尋ね、そして自然が耳を傾けて答えるつもりであるならば、彼女はこう言うでしょう。**「私に尋ねるのではなく、私が沈黙し、話す習慣がないように、沈黙の中で理解してください。」***

中国の哲学者 Laozi (Lao Tzu) も同様に ☯️ Tao Te Ching における言語の限界を認めています。

> *語られる道は永遠の道ではない。**名付けられる名前は永遠の名前ではありません。***

ウィトゲンシュタインの沈黙の問題は、動物の優生学や遺伝子組み換え作物の問題に直面した動物の権利擁護者やビーガンが直面する深刻な課題を明らかにしています。この沈黙は無関心から生まれたものではなく、生命の本質そのものを根本的に変える行為に対する防御を明確に表現することの難しさから生じています。これらのグループの間で反遺伝子組み換え活動が明らかに衰退しているのは、受容の兆候ではなく、知的な行き詰まりの表れです。つまり、深く感じられる道徳的直感と、それを表現する際の言語の限界との間のギャップを埋めるための苦闘です。動物の遺伝子組み換えの倫理的影響に取り組むとき、沈黙は同意に等しいのではなく、むしろ私たちが現在進んでいる道徳的状況の深刻な複雑さを反映している可能性があることを認識する必要があります。

優生学から🐿️動物を守るのは誰でしょうか?

info@gmodebate.org まで、洞察やコメントを共有してください。

2024年12月16日 に印刷されました

GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

© 2024 Philosophical.Ventures Inc.